

ラヴェルの墓

1914年に勃発した第1次世界大戦——熱烈な愛国者ラヴェルは、直ちに従軍を希望しました。戦線で働くより立派な作品を書いてほしい、という軍の丁重な拒否をも、彼の強い熱意が動かし、看護兵として採用されることになります。その11月、友人にあてた手紙——「わたしは、毎日傷病兵の看護にあたっています。でも作曲は続けています。今、二つのピアノ曲を書いています。ひとつは〈フランス組曲〉ですが、あなたの想像するような曲ではありません。もうひとつは、呪われた修道女の出てくる〈ロマンティックな夜〉です。……」この〈ロマンティックな夜〉はついに完成しませんでした。〈フランス組曲〉のほうは、3年後の1917年に完成しました。組曲〈クープランの墓〉です。クープランは、御存知の通り、フランス・バロックを代表する作曲家ですが、その時代の古典組曲のかたちを借りたこの曲には、戦死した友人達の名が記され、捧げられています。ラヴェルは、その〈自伝素描〉の中で書いています——「私の礼讃はクープランに対する以上に18世紀のフランス音楽に対して献げられた」

戦争は人の心を歪めます。第1次世界大戦、そしてそれに従軍したことは、神経質なラヴェルにとって、やはり大きな打撃だったのです。1919年、彼は「わたしはおそろしいほど悲しい」と書いています。戦後の2年間ほど、彼は強度の不眠症にかかり、作曲の筆がほとんどとれませんでした。それまで常に笑いをたたえていた顔から笑いが消え、もともと小さかった体は一層小さくなり、黒髪は灰色になってしまいました。世の中に対する不安と嫌悪、孤独、果てしない深い憂愁……。それらが、音楽に影響を与えないはずがありません。ラヴェルの作風は、戦後大きく変わりますが、この〈クープランの墓〉にも、3曲目のメヌエットの中間部に重苦しく、暗く、激情的なパッセージがほんの少し顔を出します。そしてまた、それまでのラヴェルらしい軽妙さとともに、そこはかたない悲しみが曲全体を流れています。

さて、ラヴェルの死はかなり悲劇的なものです。1932年10月、彼は交通事故に遭いました。始めのうちはそれは大したことはないように思われました。しかし実際は、肉体も頭脳も5年間にわたってゆっくりと蝕ばれ続けていたのです。先づ話すことが時々困難になり、そして頭に音楽が浮かび、アイデアは十分に考えつくにもかかわらず、それを楽譜化することができなくなってしまったのです。当然のことながら、そうなってしまったことに対する苦悩が彼をさいなみます。精神と理性は最後まではっきりしていましたが、その他の能力が次第に失われていったのです。「僕はひとかけらずつ消えてゆく。……」と彼はつぶやきます。1937年12月12日、一か八かの手術が行われました。しかし、最後の望みをかけた手術は功を奏しませんでした。その28日に彼は息をひきとります。脳髄の萎縮が彼の生命を奪い去ったのです。